令和の成人式ときもの文化の創造

阿部　昇
あべ・のぼる
［いつ和社長］

２０１８年1月8日。振袖店「はれのひ」が突然店舗を閉鎖しました。成人の日の本番。まさかの閉鎖によって、振袖を着ることを楽しみにしていた多くの新成人のお嬢さんたちが、途方に暮れていたあの光景を私は忘れることはできません。

私はあの日以来、業界の信頼回復に全力を注いで参りましたが、その過程であの事件は、被害者が成人式で振袖を着られない喪失感に多くの人々が共鳴したことで、きものの本当の価値や成人式で振袖を着ることの意味を日本人が改めて考える機会になったのではないかと考えるようになりました。

また、日本人のきもの離れが叫ばれるようになって久しく、私はその流れを止めようと焦燥と悲痛な思いでもがき苦しんでおりましたが、あの事件をきっかけにハタチの若者たちが「日本人の心の奥底にはまだきものを着る精神が息づいている」ことを私に教えてくれたのではないかと考えるようになりました。

そこで私はその精神をカタチにするために、自治体の成人式とは別に〝子が家族から巣立つ儀式〟そして〝親が子育てを終える儀式〟としてのまったく新しいコンセプトの成人式＝〝家族のための成人式〟というセレモニー事業をはじめました。

それは単なるコスチュームとしてのきものを超えて、何よりも代え難い〝家族への感謝の想い〟と〝きもの〟を結びつけ、日本人の心の中に〝きもの姿の家族〟を深く刻み込んでもらうことで、日本人に宿るきものを着る精神を呼び覚ましたいという私の強い信念から生まれたものです。

新規事業をはじめてまだ2年ですが、18年約６００組のご家族に、この〝家族のための成人式〟を催させて頂きました。家族関係の希薄化が懸念される現代ではありますが、だからこそハタチの若者が自らの巣立ちを自覚し、20年間育ててくれたご両親に感謝を述べる言葉には未来へ向かう力があります。そして、子育ての終わりを万感の思いで迎えるご両親が、巣立つわが子に語り掛ける言葉には真心の優しさがあります。そしてそこにはきものを着た家族がいます。まさに、日本の家族が互いに思いやる心と和装文化が融合した時間を生み出す一歩を踏み出すことができたと感じています。

当社は新潟県十日町市の買継問屋として１９９６年に創業致しました。十日町ならびにきもの産地の伝統技術と産業を守り、きもの文化を継承発展に貢献することを理念とし、きもの市場が急激に縮小する中、理念を全うすべく懸命に努力して参りました。お客さまのニーズにいち早く応えるため、小売業に進出し、老舗きものメーカー松屋織物（１８９２年創業）との統合も果たし、業界では珍しいきものＳＰＡ（製造小売業）としての体制を整えました。しかし、「仏作って魂入れず」ではダメなのです。システムを整えてもお客さまにきものを通じて何を提供するのか？　その心がなければきもの市場の復活はあり得ません。その一翼を担ってくれるのが〝家族のための成人式〟であると確信しています。

２０２０年の自国開催のオリンピックイヤー。今年生まれてくる子どもたちが成人を迎える２０４０年頃には、子がハタチを迎えるご家族が当たり前のようにきものを着て成人を祝う。そんな令和の成人式文化が日本に根付き、さらに家族の記念の想い出には必ずそこにきものがある。そんな日本であることを夢見ると同時に、それを実現するためにこれまで以上にまい進することを私の新年の誓いにしたいと思います。